

令和7年度 第2回 平塚市博物館協議会会議録

■ 開催日時 令和7年11月13日（木） 午後2時～3時30分

■ 開催場所 平塚市博物館 特別研究室

■ 会議出席者（敬称略）

会 長 小倉 俊宏

副会長 藤吉 敬子

委 員 金子 淳、広谷 浩子、山田 美保、大田 幹司

事務局 石川社会教育部長、浜野博物館長、川端館長代理（学芸担当長）、坂田館長代理（管理担当長）、藤井主査（学芸担当）、濱田主管（管理担当）

■ 傍聴者 0名

■ 会議の概要

1 開 会 社会教育部長挨拶

2 議 事

（1） 報告事項等について

- ・ 令和7年度夏期特別展について
- ・ 令和7年度博物館活動状況について
- ・ 情報発信（ホームページと YouTube・SNS）について

（2） その他

- ・ 事務連絡等

3 閉 会

■ 議事及び質疑

議題（1）報告事項等について

◆令和7年度夏期特別展について事務局から説明資料により説明。

委 員 入館者数は展示室に入った人ではなく、博物館に来館した人数ということか。入館者はどのようにカウントしているのか。7、8月は夏休みがあるので、展示解説ボランティアの対応も7、8月が一番多い。

事務局 展示期間中の入館者になる。入館者は受付がカウンターでカウントしている。

委 員 有料館であればチケットを買って子どもが何名とわかるが無料の場合には、目算か。

事務局 まず明らかに子どもと判る場合に子どもとしてカウントする。大人か子どもかわからない高校生ぐらいは大人としてカウントしている。

委 員 見た目小学6年生までとか、線引きみたいなものはあるのか。厳密性が必要というのではなく、子どもと大人を分けられるとすれば、例えば男女比で分けられる、見た目で大体何割ぐらいかなど。多分、もっと重要なのが外国人はどのくらいか。見た目ではわからないので、会話した

ときに別の言語が聞こえるなどで外国人がどのくらいか把握する。あるいは最近いろいろ日本中の博物館を回っていて気づくのが、日本地図と世界地図を貼り出してシールを貼らせるのがすごく多くなった感じを受ける。「あなたはどこから来ましたか？」と日本地図であれば日本語で書いてあるが、「Where are you from?」として世界地図の国に貼ってもらうようなことをしている館が増えている。目で見てもわからなければ、そういう形で把握してはどうか。外国人でも、アジアがどのくらいなのか、アメリカはどのくらいかというのが見えてくると、多言語対応がどのくらい必要なのか客観的な材料にもなりやすいと思う。来館者を一律で見るというよりは、これからはもっと分解し、実際にどのぐらいの人がどのぐらいの割合で来ていて、それに対してどういう対応をしていかなければいけないかという基礎的なデータが必要になってくると思う。せっかく一人一人見て、見た目ではあるが、もしかしたら分けられるかと話を聞いて思った。

事務局 属性の評価はお客さん商売なので、そうした分析は大事なのかと常々思っている。外国人の比率の客観的なデータは持ち合わせていないが、今年の夏は昨年以前に比べて外国からのお客が増えてる印象がある。考えられる原因としては、横浜ゴムの本社機能が平塚に移ってきて外国人の社員もかなりの比率いるらしく、そうした人に博物館へ足を運んでいただけてるのかという想定ができると思っている。

委 員 どの国の人が多いか。

事務局 東南アジアの人もヨーロッパ系の人も増えてるように思う。

委 員 満遍なくということか。

事務局 プラタリウムも外国人が観ているが、通じてるのかと心配をしている。

委 員 英語だけでいいのかという話もある。

委 員 展示解説ボランティアで土曜日を担当しているが、確かに海外の来館者が増えた。東南アジアの人、パキスタンやもちろん西洋の人もいる。解説ボランティアは1人を除いて英語ができないので説明ができないが、見学だけでも結構、楽しんでもらっている気はしている。

また、ロケットのこともだが、実物の展示はすごくよかった。子どももすごいと言っていた。関連の行事も人気だった。ただ、ロケットやハイブリッドという言葉に惹かれて子どもたちが入ってくるが早々に出てくることが多く、やはり展示の内容は専門的過ぎたのかもしれない。ロケットの動力に関する技術的な内容なので文字が多く、出てくる時間が早いなと感じた。もう1つ感じたことは、学生自身が毎日ではなくても、自らコミュニケーションをしながら解説する頻度を高くするともっとよかった。

事務局 解説を何日できるかということは聞いたが、学生自身が夏休みの期間もロケット開発しているので時間を取れなかった。

委 員 少し前に生物分野でアゲハチョウを寄贈品コーナーに展示していたが、実際にその蝶を飼育した人がかなりの日数、展示室で声掛けをしながら説明していた。来館者の満足度が非常に高く、

展示解説ボランティアは直接関わっていないのに、帰り際に「よかった、有難う」という言葉を何人かから掛けられた。やはり展示に関わった本人がコミュニケーションを取りながら説明すると、満足度は飛躍的に上がるということを目の当たりにした。

委員 実際にこの特別展を見ていないから何とも言えないが、アンケートで、難しかったという意見が多かったということに対して多分子どもの意見だったと思うが、これはすごく難しい課題だと思う。というのは、ターゲットをどこに据えて、ターゲットではない人たちへの手当が必要なのかということだ。よく言われるのが映画の評価で星いくつという時に、大人向けの恋愛映画を小学生が見てわからなかったと言うのは当たり前だが、もしその映画評で小学生が大人の恋愛映画を見てよくわからなかったとして星1つを付けたとしても、その映画の質自体の評価には全く影響はないが、星1つというデータは出てしまう。それをどうとらえるかということだと思う。つまりターゲットにしているのは大人の恋愛映画が好きな人たちで、そこから外れる人の評価をどの程度気にするべきかということ。今回は何とも言えないところだが、ロケットのエネルギーや仕組みなど専門的なことが多くてハードルが高い内容であれば、極端なことを言うと、子どもをターゲットから外すということもあり得たかもしれない。すると、もっと知りたい人に対して手厚く対応する形をとることもできるが、公共性がある公立の博物館だとなかなかそうはいかないと思う。そうしたときに多層性のある展示、ターゲット層に対してはこういう展示、知識や関心がない層に対してはこの展示のように、多層的にやっていくのが理想だとは言われているけれども、実際のところなかなか難しい。そうすると、今回はこれを伝えたいので子どもには難しいというときは、極端な意見なので曲解されるとよくないのだが、アンケート対象から子どもを外してもいい場合もあると思う。今回がどうなのかはわからない。ただ、満遍なく高い評価がなければいけないというのは実際には難しく、博物館の姿勢、展示の意図や内容、伝えるべきメッセージなどに関わってくるので一概には言えないが、満遍なく評価が高くなければいけないという風潮は、それだけではないのではないかと思った。これは今後の課題というか、議論の論点になっていくかと思う。

事務局 アンケートの総合評価の部分で「よくない」と答えた人が2人いるが、実はこの2人は小学生ではなく高齢の人だった。小学生で「よくわからなかった」という答え方をしている人が何人かいるが、その子たちの総合評価は「普通」や「まあよかった」だった。内容は難しいが、展示としては、よい評価をいただいていた。そういう意味では、理解が難しかった子たちでも興味は示してくれたという受け取り方をしている。切り捨てるというところには当たらないのかなと思う。

委員 興味や関心の入口のようなことで、難しいけど面白かったという表現が有り得るということは面白い。

委員 小学校教育に携わる者として、アンケートの感想を読んでいてすごく嬉しかった。今の話に通じるが、「難しくてよくわからなかった」でいいと思う。面白そうにしていた親の姿を見るこ

とで、子どもたちは興味関心の入口に立つことができている。社会教育という大きな視点やキャリア教育という視点に立ったときにも、難しくてよくわからないけれど面白い、でもなんかよかったとか、そういう曖昧なものが実は大きなパワーとなってその子の中に宿ることも多々あるので、非常に熱が伝わりやすかったこの展示は、子どもたちには今は難しいけれども、いつかの自分に何か役に立つきっかけにはなったと思う。集客数などの評価には結びつかないかもしれないが、人生の中ではその子にとってはきっといつか価値のあるものになっているのではないかという感想だと思わされた。ロケット工学みたいなことは子どもたちがなかなか身近に触れることができないので、この展示に訪れたことで、興味を持ってやってみたいと思うが子が出てきたらすごいなと思う。

委 員 この企画展は東海大学と神奈川大学が関わっているが、普段から密に関わっているのか。

事務局 元々、2016年に平塚の海軍火薬廠のロケットに関する展示をした時に、現代でもロケットを作っている学生たちがいる、との情報に触れそこから繋がりが生まれた。時間が経ち、非常に成果を上げているということで、今回改めてメインの展示にして紹介した。

委 員 博物館から大学に声をかけたのか。

事務局 博物館から声をかけさせてもらった。

委 員 東海大の建学祭や何かのフェスタなどがあると大学に行くが、こうした活動をしてることは知らず、大学のサークルが公の施設で特別展として広く紹介されたことは、携わった学生たちにとって大きなチャンスだし、広報という意味でも大きなことで、ありがたい気持ちになった。実際に今回の展示は見えていないが、博物館はわりと古いものを展示してそのよさを未来に伝えましょうという展示が多い中、若い人たちと未来に向かっていくテーマの展示は新しく、地域の大学とコラボというのも素敵だし、新しい視点でよいと感じた。また、アンケートに「頑張ってください」という感想が非常に多かった。展示をして「素晴らしい、これからも頑張ってください」という感想はあまりないと思う。皆さんに見てもらい応援してもらった、それを博物館も関連して後押ししているということがよくわかり、よかった。

「ロケッティア」という言葉に馴染みがないが、ロケットとフロンティアをくっつけた造語なのか。

事務局 英語でロケットに携わる人という意味で、ロケッティアという言葉を使うようだ。

委 員 開発者ということか。

事務局 馴染みがない言葉ではあるが、あえてそれを使うことによって何か感じてくれればと考えた。

委 員 2度ばかり見た。最初に見たときは難しい言葉が多く、専門性が強くて理解しづらかった。もう一度少しずつ見たが、地元の東海大、神奈川大の学生がロケット開発をしているのはすごいことだと感じた。博物館が地元の学生たちを通して、市民の皆さんに知識を広げる場になって嬉しい。

◆令和7年度博物館活動状況について事務局から説明資料により説明。

委員 展示解説ボランティアの活動の活動実績だが、この数字は定例会だけの数字か。

事務局 定例会だけの数字だ。

委員 活動回数であれば開館日は毎日活動しているので、この数字を反映するならば「ボランティアの会定例会」と書いた方が正確だ。また、7、8月は来館者数が伸びているが、今年の酷暑の影響があるのではないか。展示解説の活動をしていても思ったが、館がクーリングシェルターになっている。

委員 今の話に関連するが、夏がますます暑くなり、それにどう対応するかということが今後も一層求められる。クールスポットとしての役割が増えていく。ワーキンググループの活動は酷暑で野外活動を制限したとあるが、夏は外に行けないならば別の季節に振り分け、なるべく室内でできることを探していくようにシフトしていくことになると思うが、行う予定だった行事をなくしたということなのか。

事務局 グループにより対応はまちまちだが、「東国史跡踏査団」という史跡等を歩きながら巡って勉強するグループは、夏場は学芸員の勉強会のようなものをグループの中で行っている。

事務局 元々、夏は野外活動を組んでいないグループが多いが、暑さ対策で一部変更した。ワーキンググループ年間計画の中で、特にここ10年ぐらいは、7、8月に屋外に出ることはなるべく控える傾向になっている。真冬も、活発には外で行っていない傾向が元々あるかと思う。

委員 それが続いていくのか、程度が高くなっていくのか。それを元々の計画に今後も組み込んでいくのだと理解した。

◆情報発信（ホームページとYouTube・SNS）について事務局から説明資料により説明。

委員 展示解説ボランティアとして活動する中で2人の来館者から、YouTubeはいつ更新されるのか。新しいものが待ち遠しいと聞かれたが、何と答えればよいか。

事務局 更新スケジュールとしては、月ごとに考古の分野、生物の分野と順繰りに回している。

委員 展示は、展示を見た人にアンケートを取って感想を聞くというフィードバックがあるが、「情報発信」は、もしそうした仕組みを作るとしたらどういう感じになるのか。

事務局 ツイッターに関しては、コメント機能をオフにしている。不適切なことを起こすと炎上するようなことになりかねないところもあり、コメント機能はカットしている。YouTubeもコメントできないようにしている。

委員 ならば来館者アンケートの中にYouTube、SNS等の感想の項目を設けるということ是可以する。

事務局 現状では、特別展とプラネタリウムは観覧者向けのアンケートを定期的に取っている。それ以外は、普及行事の一部で子どもと親にアンケートを取るぐらいで、情報発信について今までアンケートを実施したことがないのでどこかで聞いてみたい。

委員 動画が待ち遠しい人がいるというのはすごいことだ。これ以上に仕事を増やすようなことを言うのはよくない気もするが、大きな話で言うと博物館法が2022年に改正され、デジタルア

ーカイズ化が努力義務になった。今年の春先に文化庁からミュージアムDX実践ガイドが出て、博物館でもDXをする、デジタルトランスフォーメーションを進めましょうという風潮になってきている。ミュージアムDXとかデジタル化というのは、博物館が持っているいろいろな資源やリソースをデジタル化して公開しましょうというものだ。大きな文脈でとらえると、YouTube やツイッターという情報発信以外に、資料のデータベースをデジタルアーカイブとして公開するとか、刊行物をPDFにして見られるようにするとか、ホームページの機能拡充のようなことも含まれる。それに沿うと、情報発信の項目の中には、どういうデジタル化が進んだとか、どういう資源を提供しているとか、それに対してどのくらいアクセス数があったかというのが趣旨に則っている。これ以上に仕事を増やすのも本当に心苦しいが、もう少し広い意味でのデジタル化ととらえた方がよい。YouTube の再生回数に一喜一憂するのはモチベーションに繋がるので再生数は重要だと思うが、それが下がるとよくない、ということではないと思う。デジタル化してきちんと情報提供できる環境を整えているということの方が重要で、アクセス数や再生回数は結果ではなく副産物の1つにすぎないと思う。もっと幅広く、これまで博物館が持っていて提供できなかった情報が提供できるようになることが博物館としては重要で、そんな観点から広くとらえられるとよい。

委員 博物館が持っている資料をどのようにアーカイブ化し、市民に発信できるのか。以前、館長は個人情報などいろいろなものが関わってなかなか難しい、という話をされたが。

事務局 博物館としては、デジタルアーカイブだけでなく資料データベースがまだ完璧ではない。まだ先の長い仕事が残っているが、終わるのを待っていてはいつまでたってもできない状況なので、できるところからデジタルアーカイブを進め、公開していきたい気持ちはある。分野ごとに資料データベースの完成度が異なっていて、民俗分野だと8、9割のデータベースができていて、デジタルアーカイブにデータを移して公開できる見込みはあるが、単純にテキストだけのデータでは済まなくなり、画像や動画も必要になり、課題の1つと思っている。そこに対しては、学芸員だけではできないところがあるので、できれば予算をつけて、外部の手を借りて作っていかねばいけないと考えている。

委員 データベースの公開はお金も時間もかかるし簡単にはできないと思うので、その部分ではなく、品切れになった展示図録をすべてスキャンしてPDFにしてリンクを貼り付けてホームページにアップする、刊行後10年のものや品切れの過去の図録や年報などをPDFにする程度ならそんなに時間はかからない。ホームページにアップしてリンクを貼りつけるだけで十分だと思う。利用者にとってそれはすごく重要なことで、過去の図録がPDFで見られるのは本当にありがたいことだ。ただ、購入してもらい収入を得ることも必要なので、どこかで線引きが必要になると思うが、条件をつけてどんどん過去のものはPDFにして公開をしていく。そのために、刊行物を裁断して自動でスキャンする程度ならそんなに時間はかからないのではないかな。

- 事務局 その点に関しては、現状で表紙だけはアーカイブで公開している。なぜ表紙だけかという、基本的には館蔵資料を中心に展示を構成して図録を制作するパターンが多いが、他館や個人から借用した資料が含まれるものもある。過去のは権利処理があやふやなものが結構多く、元々の所有者が亡くなるなどで連絡がつかない場合が多くある。古いものに関しては特にそういうことが多い。その辺の権利処理が見通せないところがある。
- 委員 2つぐらい方法があって、1つは写真だけをぼかすという面倒くさい方法。もう1つは、文化庁に裁定を依頼する方法がある。連絡をとったが著作権者に辿り着けませんでしたと申し出て許可がもらえれば、権利処理したことになる。
- 事務局 文化庁が裁定してくれるのか。
- 委員 そうだ。連絡を取ろうと何ヶ月間か努力したが行き着かなかったという証明ができればよく、市史の公開などではそうした方法を行っている。その方法も面倒であれば、文字しかないものであるとか、年報から始めるとか。
- 事務局 博物館の情報を楽しむ側からすると、博物館資料の公開をどんどん進めて欲しい希望があると思うので、資料のデジタル化の話は必要なことだと前々から認識している。この4月から図録の割引販売を100円や200円、300円と値段を下げ、多くの方にお求めいただいている。だが、本当に必要なものは、手に入れることができない過去の図録などで、短期間で品切れになったものは需要が高いということなので、何らかの形で要望に応えていかないといけない。今言った権利処理の問題もあるが、とりあえず公開をして何か問題があればご連絡ください、場合によっては取り下げます、という方法で公開している館もある。
- 委員 それでいいと思う。
- 事務局 そうであればわりとスタートを切りやすいというところがある。手をこまねいているだけでは、どんどん時代に置いていかれていくし、市民サービスの向上という点でもなるべく早く着手しないといけないと思っている。その方法で大丈夫なのかという懸念もあるが、かつての協議会委員からもそうした意見をいただいている。おそらく、50年前の図録などを遡って権利処理を追うことは現実的にはほぼ不可能で、事務作業的にも労力と見合わないという問題もある。過去の年報には参加者の実名が載っている場合もあり、どう処理するかという問題もあるが、ご迷惑になる場合にはご一報いただいて処理をするという方法もあるのかと思う。
- 委員 例えば自治体史の写真集みたいなものを作る時には、ページの中に写真を載せると顔が載っていると何か問題が起こるのでは、と尻込みをする事務局の人が結構いる。ある自治体史では、戦前のお祭りの写真の参加者の顔をぼかしたこともあるが、実際には問題は起こらないし、むしろ写真に載ることの方が嬉しいようだ。それは戦後になってもそうだと思うのでそこまで恐れなくてもよく、「何かあったら連絡してください。誠意をもって対応します」でも十分いけると思う。そういう対応をすればすぐに訴訟ということは通常起こらないし、市民の公共的な財産をより広くみたいなもの、あるかないかわからない訴訟リスクの方を天秤にかけてやっ

ていくしかないのではないかと。無責任なことは言えないが、なるべくデジタル化を推進していただければという気もする。

事務局 一歩進める勇気をいただいた。

委員 土屋地区の有志が歴史の会を作り10年程前に厚い冊子を作ったが今はその冊子がまったくなく、公民館だよりに「捨てる方がいらっしゃったら公民館に持ってきてください」と毎月コメントが出ている。その冊子を編さんした人は「資源ごみの中から1冊持ってきたよ」と話をしていた。博物館の古い冊子などの資料は何冊も持っていて、他の人も持っていると思うが、それが捨てられるのはやはり心苦しい。特に特別展の図録については「処分される方があったら、ご相談ください」や「ご一報ください」という形でもう1度集め直すのも1つの手ではないかと思う。

委員 集まってきたものは、無料で提供するようにするのか。

委員 そうだと思う。私が持っているものもいなくなれば多分、家族はごみとして処分すると思う。そんなときに博物館に相談できるとよいと思う。古い資料を残しておくことは大事なことだと思う。

議題（2）その他

◆事務連絡等

委員 1階の寄贈品コーナーで最近始まった「野尻抱影 星の文人の軌跡」のサテライト展示を2階の情報コーナーでも行っている。案内が1階寄贈品コーナー入口の展示パネルにあるが、十分に伝わっておらず2階まで足を運ぶ人が少ないので、わかりやすくした方がよい。野尻抱影は星や天文に関係のある人には知られていると思うが、展示解説をしているときになかなかマニアと思われる若い人が2人来て、2階にも展示があると伝えると「知らなかった」と2階へ上がって行った。もう少しわかりやすくした方がよい。もったいないと思う。

事務局 案内パネルに、2階の展示の紹介をつけた方がよいか。

委員 「2階にも展示しています」というのが伝わる形がいい。

委員 博物館改修にあたり劣化度調査をこれから始め、耐震とバリアフリーと展示が課題になっていると話があったが、劣化度調査はその中の耐震のみのことなのか。それとも全体を含めどのぐらいの範囲の調査になるのか。

事務局 全体を含めてという形だ。耐震だけではなく、例えば空調だったりトイレだったり、今は階段のスロープで上がっていくような昇降機がエレベーターになったりとか、そういった設備も含めた全体的なものになる。

委員 劣化度調査の結果によっては、大規模改修になるかもしれないということか。部分的で済むかもしれないのか。

事務局 部分的は、まずないと思う。

委員 それに合わせて展示のリニューアルもするのか。

事務局 合わせる。耐震工事の場合は展示も含めて一度、撤去することになると思う。どこに梁を入れなければいけないという設計に進むと思うので、その際に展示はこのままといったことはないと思う。ずっと展示替えをされていないので、学芸員の希望もある。

事務局 当館は開館6年目に第1回目の常設展示替えをし、そのあと5～6年に1回のペースで1階と2階をワンフロアずつ交互に展示替えをしてきた。それが第5回目、平成17年度で止まっていて、20年以上常設展示の内容は基本的には変わっていない。ワンフロアにつき10年間ぐらいで展示替えをしてきたわけだが、学問のレベルも進歩しているし、調査研究の進展や新着資料の収集などを反映させる必要性や、新しい展示の手法なども取り入れるために展示替えをしてきたが、建物の耐震性能が不足しているため、いずれは耐震補強工事をしなければならない。補強工事のときには、現在の展示ケースなどをすべて撤去、解体しなければならない可能性がかなりあると指摘されている。展示替えといえども1億以上は予算をいただく必要があり、それだけの金額をかけて実施して数年後に解体ということではコストパフォーマンスを考えるともったいないので、改修まで待ちましょうということです。ずっと待ち続けてきた。20年以上かかるとは思わなかったが、公共施設の改修工事が集中している関係などの影響を受け、ようやく改修へのスタートがきれるようになったというところだ。

委員 大規模改修以外に選択はないのか。最悪、建替もあると思うのだが。

事務局 建替えも選択肢の1つではある。劣化度調査ではコンクリートの強度や鉄骨の腐食具合を調べるが、それらが長寿命化に耐えられないとの判定を受けた場合は、壁を二重にして補強するなどの方法もあるのかもしれないが、あまりにも数値が低い場合には、長寿命化は厳しいという判定がくだる恐れもある。強度が大丈夫ならば改修にどれだけコストがかかるのか、設備面などの更新にいくらかかるのか項目ごとに概算費用が出される。また、柱や梁などを補強するために新たに耐震壁というコンクリート壁や鉄骨ブレースを設けることで空間が狭められる可能性があり、博物館の意図するとおりに展示を実現できるのかという問題もある。こうした様々な観点から検討し、改修がベターなのか、思い切って建替の方がよいという意見もあるかもしれない。あくまでも調査の結果、総合的な観点から判断していくことになると思う。

委員 具体的に動き始めそうだとということで、期待をしている。

事務局 補足で、文化ゾーンの話になるが、元教育会館が3館統合の文化公園会館として来年の4月にオープンする。そのあと中央図書館は予定では来年6月から休館し、引っ越しなどのあと大規模改修工事が始まる。美術館もそのあと並行しながら中央図書館と同時期ぐらいに大規模改修をする。それが落ち着くと博物館の順番が回ってくるか、というところになっている。

委員 順番としては、美術館より博物館が先なのではないのか。

事務局 そういう意見もある。

事務局 昨年度の活動報告の年報49号だが、例年どおりの内容に新しく付け加えた部分がある。協議会での委員の意見を受けて、入館者数だけでなく、新たに総利用者という集計を追加した。総

利用者をどのようにとらえるのかはいろいろな意見があると思うが、入館者がまずあり、学芸員等が外部から講師として依頼されて実施した行事の参加者も加えた。さらに、インターネット上の利用者ということで、ホームページの訪問者数、YouTube のチャンネル登録者数、X のフォロワー数、これらを合計したところ、10万8,517人になった。来館者自体は5万143人だったがこうした出し方をした結果、ほぼ倍の数字となった。このとらえ方でよろしいか。

委員 すばらしい。こういう見せ方の方がよい。

委員 ダブルカウントはないか。

事務局 ない。入館料を払う施設はシビアで、入館者やプラネタリウムの観覧者という有料の入場者数が重視されると思う。本市の場合は入館が無料なので、総利用者という数え方で博物館がどれだけ利用されているのかを、今後は庁内でも使っていこうと思う。

博物館は昭和50年に建てられ、昭和51年の5月1日に開館した。令和8年の5月1日に満50歳を迎える。今まで10周年ごとに博物館の歩みを振り返るような特別展を開催してきたが、50年という大きな節目に周年記念展を開催する。博物館の歩みを振り返り今後を展望するような内容の展示を検討している。関連事業として、博物館のオリジナルグッズ作成について練っている。具体的には、博物館の資料をデザインしたトートバックやマスキングテープ、クリアファイルなどを5月1日に間に合うように用意したい。平塚市に博物館が存在している意義のようなことを、市民の皆さんにも考えていただく機会にできればと思っている。来年度の夏の展示、秋の展示でも50周年の冠をつけるが、始めは来年春の3月後半から開催する50周年記念展になる。

委員 記念誌のようなものは発刊されるのか。

事務局 図録を発行する。

委員 オリジナルグッズを楽しみにしている。

●次回の協議会は令和8年3月24日（火）午後2時から開催することにした。

閉会後に博物館1階特別展示室で開催中の秋期特別展について、担当学芸員が解説をした。